

神奈川県立愛川高等学校 平成 29 年度 第 2 回学校運営協議会議事録
第 1 回学校評価部会議事録

書記：広報研究開発グループ

中村 圭子

安達 晃雄

日 時： 平成 29 年 12 月 18 日（月） 10：00～12：00

場 所： 神奈川県立愛川高等学校 校長室

参加者： 石田 裕昭 神奈川工科大学 入試広報課 担当部長
佐野 昌美 愛川町教育委員会 指導室長兼教育開発センター所長
小林 晴男 愛川町三増区長
小倉 英嗣 元 PTA 会長
川匂 秀彦 愛川高校同窓会長（欠席）
林 直子 愛川高校 PTA 会長
足立原 泰 明日楓会会長
大沢 利郎 愛川高校 校長

事務局： 尾本 一則 愛川高校副校長、
中西 正文 愛川高校教頭（欠席）
中村 圭子 愛川高校教諭（広報研究開発グループ員）
安達 晃雄 愛川高校総括教諭（広報研究開発グループリーダー）

議事録：

- 1 学校運営協議会長挨拶
- 2 校長挨拶
- 3 協議

（学校評価部会）

- ・平成 29 年度上半期の愛川高校の取組みについて（校長）
学校の取組み（学習・生活指導・生徒活動・進路指導・地域連携）、連携型中高一貫教育の取組み
コミュニティスクール

○学校の取組み

- ・生徒による授業評価（別途資料より）のうち
 - 2 授業の充実感を感じられる授業だった。
 - 4 生徒が自ら考え取組む場があった。
 - 7 積極的に学習に取り組んだ。
 → これらの項目が高評価だったことに注目している。・・・授業改善に繋がっているといえる。
- ・1年生の特別指導案件
件数・人数は以前と比べて半減している。
- ・遅刻数
平成 27 年よりほぼ半減したが、11 月以降 1・2 年生の回数が増えている理由
・・・慣れが出てきたこともあるが、相模原からのバスの大幅な遅延（高田橋の拡幅化がより激

しい混雑を招いた) 相模原から来る生徒 (約 4 割)



2 学期期末試験では全日程とも時間割通りに始めることができず。
(神奈川中央交通に申し入れたが、警察や国との絡みもあり改善は容易ではなさそう)

・進路指導

進学・・・推薦入試を利用する生徒が多い (昨年度 25%)。一般入試も増加傾向。
自分に自信がない生徒が多いため、「有名」大学への指定校推薦を敬遠する面がある。
生徒が自分から動き出すことが遅い→粘り強く指導を続ける。

・地域連携

i-Unit=ブラッシュアップ (磨き上げること)・・・単なる小・中のやり直しではない。
本校生徒は小学校段階での学習の躓きを持っているが、i-Unit を通して少しずつ改善されている。
ファイヤーガードクラブの新設 (年 1 回程度) =防火防災委員
消防、消防団に学校に来て頂いて防火防災を学ぶ。
→ 土日の活動があるため生徒への負担が多いので消防と今後相談予定。

○明日楓会

- ・平成 30 年度入学生より学校外の学修により一単位を修得することを卒業の要件とする。
(インターンシップ、ボランティア、英検など)
自分から主体的に学ぶ。→2・3 年生でも自ら進んで参加できる流れにすることが目標。
最終的に地域に貢献できる。

○意見聴取

- ・生徒による授業評価について
生徒からの評価と職員の意識に差はないか。今後職員からも調査をとることも考えるべき。
→若い教員が多く、講義形式の授業ではなくなりつつある。
各教室に大型ディスプレイがないのが課題。
教員の中に優秀賞を取った者がいる。
若い教員の中にも温度差があるのでは。
→相互に授業観察 (互観) して研究していくべき。
- ・生徒が作文で神奈川新聞社賞を取った。
→素晴らしい内容。なかなかここまで書けるものではない。

○進路指導について

- ・指導の継続、資格取得の強化
介護体験、ボランティア←この部分を単位化して促進することを考えている。
今は和太鼓、獅子舞がボランティア活動することで一単位取得 (3 5 時間)。
↓
内陸工業団地 150 社あるが、地元の子どもの就職が少ない。
職場体験を通して現場を見る。そして希望する職業に就くために、どのような努力をしていくべきなのか考える機会を与える。
↓ ()
工場・企業側の意見としては工場見学は可能だが、全生徒を受け入れるのは保安上難しいという声もある。

以上学校評価部会承認

(学校運営協議会)

- ・愛川高校の現状を踏まえて、これからの愛川高校の目指す姿と愛川高校学校運営協議会の取組みについて（熟議）

※評価部会中間報告のとおり、現状の愛川高校は大きく変わってきています。

※一方、外的環境においても、コミュニティスクールとして全県の先導的モデル（地域学校協働本部との連携による地域活性化と生徒の育ちを同じ地平で考える取組み）や、平成 30 年度入学生から始まる新しい高大接続への取組み等大きな変化が見込まれます。

※校内的には、平生 27 年度に本校がこの先 10 年育てていきたい生徒像を明確にした。これは町の小中一貫教育ともつながるものと考えている。

※こうした内外の環境を踏まえ、愛川高校のこれからの展望と、本協議会で取組んで行くことについて、各委員による協議をお願いいたします。

校長）愛川高校の置かれた外部環境についていくつか説明する。

- ・国・県の施策の下に愛川高校があるということ。

- ・県の高校改革、国の高大接続改革…大学入試が変わる→だから高校も変わる。

H30 年度入学生は大学入試が変わる代になる。

調査書 A 3 見開きで一頁の制約がなくなり、さらに +α を添付資料でつけることが可能になる。

- ・その少し後に新学習指導要領が運用されるということ。

- ・また愛川町に関しては少子化が危惧される。

現在の高 1 では愛川町から 380 名中 80 名が本校に入学している。

中 2 では 350 名、小 2 では 300 名からの入学者となる見込み。

- ・愛川高校のランドデザインでは、地域で活躍できる、地域に貢献できる人物を育てるとしている。

↓

愛川町の掲げる教育の延長に愛川高校の教育がつながっている。

↓

その前提で、「こういうことが必要」といった意見を求めたい。

- ・高校の職員の労働条件も新たな取組みにもまして考慮される必要があると考えている。

意見）○学校業務改善ボランティアを設定できないか。16 時過ぎから小中学校で例えば図工の絵を貼ったり、剥がしたりとか、印刷とかを愛川高校の生徒に担ってもらう。

↓

可能性はある。ただし、業務アシスタントの丸投げの形はやめて欲しい。

ボランティアを通して育つ・学ぶがあるものが望ましい。

大変な作業の丸投げだけだと生徒は継続しない。

○将来の進路に向けて、いろいろな体験は大事だと思う。

学校のアピールを地域に向けて行って欲しい。

○生徒がボランティアの企画に参画しないとだめ。

ボランティアは主旨、目的を明確にする必要がある。

↓

単発の「地域貢献ボランティア」活動を積み重ねて 35 時間とする手法を残していきたい。

○明日楓会の会長としても学校運営協議会と連携していきたい。

大沢校長の遠大なる計画に対して、どのように支援していくのか。

優良表彰された先生を活用していくとよい。互見授業をして研修すべき。

中学校ともよいが、まず互いに研鑽すべき。

ボランティアも1学年では3人×80事業所×35時間の連携先を確保することは容易ではない。

- もっと単純に考えている。ボランティアを通して仲間ができる。
河原を綺麗にしたい。自分が役に立っていると思えることが必要だ。
出会いを大事にしている。自分の人生について、どう生きたいのか、何をしたいのか。それを学校側がサポートし、地域でサポートしてやりたい。
そのことを生徒一人一人に気がついて欲しい。他者の役に立つ。他者と出会い。他者から感謝される。このような経験が人を育てる。こういう仕事に就いてみようかと思う。
- 大学も生き残りをかけているが、愛川もTOP学生を受け入れ、特別のカリキュラムで卒業させる特進クラスは作れないか。厚木高校に行くような生徒を愛川高校で受け入れられないのか。公立校では無理なのか。

↓

今年の4月までは進路別希望クラスを行っていた。進学クラスにしていたが逆に油断や消去法による甘さが生じてきた。今、希望クラスの枠をはずしたことで変わってきた。逆に進学が増えてきた。県内の高校では表では言わないが、クラス分けで対応している学校もある。

↓

どんな生徒も愛川高校で育てられる体制をとるとよい。

外国籍の生徒はどのような国が多いのか。

↓

今はフィリピン、パキスタン、中国、南米

↓

こういった生徒を活かす事はできないか。得意とする語学の講座を作るのはどうか。歴史とか、地域のことで生徒を講師に講座にする。

↓

グローバル化の資源として有用しうる。・・・しかし、現状では日本語の大きな壁が存在する。彼らをきっかけとして、高校も地域も発展する可能性がある。

校長) 貴重なご意見を感謝します。

校長はいずれ交代していくものだが、それによって軸がぶれない体制にしたい。

以上学校運営協議会承認

4 その他

- ・次回は平成30年3月の予定、詳細は別途お知らせする。
第3回学校運営協議会・第2回学校評価部会

以上で学校運営協議会終了